

## 【オフィシャルパートナー企業インタビューシリーズ】

日本ゴールボール協会をさまざまな形で応援してくださっているオフィシャルパートナー企業の皆さんに、各社のお取り組みや思い、当協会への期待などを伺うインタビューシリーズです。

### <第2回: JA三井リース様> [取材日: 2020年10月1日]

JA系の協同リース株式会社と三井・商社系の三井リース事業株式会社の経営統合によって2008年10月に発足した総合リース会社です。経営理念として「Real Challenge, Real Change」を掲げ、独自のネットワークや専門性で社内外のリソースを『つなぐ・つなげる』ことで金融の枠組みを超えた高付加価値のサービスを提供し、お客様や社会の課題解決に取り組んでいます。

▼公式サイト: <https://www.jamitsuilease.co.jp/>

2017年2月から日本ゴールボール協会のオフィシャルパートナーとして継続して応援してくださっています。今回は支援事業担当の、井野真吾さん(執行役員 経営企画部長)、松村直人さん(経営企画副部長兼広報 IR 室長)、上重貴靖さん(広報 IR 室)にお話を伺いました。(以下、敬称略)

▼ゴールボール支援の取り組み:

<https://www.jamitsuilease.co.jp/csr/goalball.html>

### <理解から広がる可能性。社会に対して優しくなれる社員のきっかけに>

——日本ゴールボール協会を支援していただいて約3年半となりますが、支援のきっかけから教えていただけますか？

井野

当社が特定の競技団体を継続的に支援するのはゴールボールが初めてになります。当社は、「よりよい社会と未来のために」挑戦し続けることを企業理念「Real Challenge, Real Change」に掲げており、この理念に合致する社会貢献活動を模索していた中と、当社の関係先から日本財団パラリンピックサポートセンターの紹介を受けました。障がい者スポーツの普及支援は「障がいの有無を超えた共生社会の実現」に貢献するとお聞きし、当社が目指す「より良い社会と未来」とも一致することから、当社に相応しい活動だと感じました。これが社会貢献活動を障がい者スポーツの支援に絞ったきっかけです。

——数ある障がい者スポーツのなかで、ゴールボールを選んでいただいたのはなぜでしょうか？

井野

リサーチや体験会を通して、ゴールボールはアイシェード着用がルールなので、「目が見えない」という障がいの有無に関わらず、誰でもプレーできると知りました。障がいのない人も一緒にプレーすることで、競技を通して「目が見えない」状態を体感でき、それが視覚障がいのある方の理解を深めることにもつながると考えました。

さまざまなスポーツがある中で、一緒にプレーできる「参加型」は競技としての面白さやエキサイティングさも実感でき、より親近感もわきます。チーム球技なので一体感の醸成にもつながり、支援するのにふさわしい競技だと思いました。

それに、オリンピックにはないパラリンピック特有の競技であることも理由の一つです。東京パラリンピックにも男女ともに出場が決まっています。女子はロンドン大会で金メダルの実績があり、男子も初出場での上位進出を狙っています。トップレベルのチームがより高みを目指し、強くなっていく様子を皆で応援できることも価値が高いと思っています。

——協賛いただいてから、ゴールボール体験会や観戦会なども積極的に実施されています。印象に残っていることなどがあれば、ご紹介ください。

上重

協賛を始めて半年後の2017年8月、社員約60名が女子の国際大会「ジャパンパラ競技大会」にボランティアとして参加した時のことです。試合中に「クワイエット・プリーズ(お静かに)」のボードを掲げるボランティアを体験しました。私自身もその一人でしたが、「簡単なことでも助けになるんだ」というのが率直な感想でした。

体験する前には、「障がい者スポーツのサポートはハードルが高い」というイメージがありました。障がいのある方と関わるので、何か繊細な配慮をしなければならないのではないかと感じていたからです。しかし、「ボードを掲げる」という活動も大きな助けになるのだと分かり、自分の中でのハードルが下がりました。できることはたくさんあるし、できることから始めればよいのだと思いました。

井野

ゴールボールの「静かに見守る」というスポーツ観戦の形も珍しいですね。試合のボランティアは競技の基本から関わることができる貴重な経験だと思います。

——心強いです。実は、ゴールが決まったときなど声を出せるタイミングもあります。ゴールボールならではのメリハリのある応援方法も、ぜひ楽しんでいただきたいと思います。

上重

そうですね。まずはゴールボールという競技を知ることが大切だと考えています。たとえば、2017年の秋、としまえんで行った当社恒例のファミリーイベント、「スポーツフェスティバル」では、ゴールボール体験ブースを設置しました。子どもたちを含め、多くの社員が参加してくれました。まずは、社員が体験を楽しんで学ぶ。そこから多くの人に広め、ゴールボールの普及に役立てればと考えています。



としまえんで開催した「スポーツフェスティバル」の様子  
初めて体験するゴールボールに、驚きと歓声と笑顔が広がった

上重

そういう意味で、年1回行っているゴールボール体験会も重要です。参加した社員からは、「目を覆って暗闇の中で動くスポーツなんて、今まで体験したことがない」「日常生活でもほとんどない貴重な体験」「見えない中で動くのはすごく難しい」といった驚きの感想が聞こえてきます。選手たちはボールが見えているかのようにスムーズに動き、簡単にプレーしているように見えます。でも、その動きがいかに大変か、そして選手のプレーの素晴らしさを、体験会を通じて社員は実感しています。

そんな選手のために直接的に何かできないかと協会と相談し、ビニール製のゴールも提供しました。実際のゴールは金属製で重く、持ち運びも大変です。実は体験会するとき、私たちも使ってみたのですが、ビニール製のゴールはポンプで空気を入れるだけで、組み立ても片付けも簡単でした。

——ありがたく、活用しています。では、協賛を始めてから、御社内に見られる変化などはありますか？

松村

これまで、体験会はのべ 60 名、講演会も 150 名ほどが参加しています。大会の応援も含めると、さらに多くの社員がゴールボールに触れていると思います。特に新入社員研修ではゴールボールについてかなりの時間を割いています。当社の理念を反映した取り組みを知る大切な機会となっていて、研修後も継続してゴールボール関連のイベントに参加してくれる社員も少なくありません。手ごたえを感じています。

上重

協会スタッフをお招きし、ゴールボールをテーマにした講演会は、日常的に白杖をもって生活する中にどんな困難さがあるかなどを学び、視覚障がいへの理解を深めるよい機会でした。また、選手の皆さんからは、「視覚障がい者に対して心に壁を作らず、気軽に声をかけてほしい」というお話も伺いました。「どう声をかけていいかわからない。デリケートだから近寄らないほうがいいかな」と思っていた社員も多いと思いますが、私自身も含めて、「声をかけてもいい。かけたほうがいいのだ」と新たな発見になりました。ゴールボール支援という取り組みがなかったら、今もまだ知らなかったかもしれません。

——御社の事業に役立ったり、影響しているような部分がありますか？

井野

ゴールボールへの支援は元々、事業に結び付けようとして始めた取り組みではありません。全国の社員皆で一つのスポーツを応援することで社の一体感を醸成することが一つの狙いです。また、共生・共存社会の実現を目指すといった社の理念がゴールボール支援を通して自然に理解され、「社会に対して、優しくなれる社員」が増えてほしい。それが社の強みとなり、結果として事業にプラスになれば嬉しいですね。

松村

取引先とのアイスブレイキングに役立っているところもあります。本社エントランスにゴールボールの展示コーナーやサインージを設置したり、名刺に加えて販促用のカレンダーや手帳にもゴールボール協会ロゴを入れていますが、人目を引くので会話のきっかけになります。よく知られているスポーツよりも、むしろ、「ゴールボールとは？」と興味を引きやすく、話題が広がりやすいです。

井野

実は、手帳にロゴを入れるアイデアは、販促品制作を担当する社員から「ゴールボールの普及につながるのでは」と提案されて実現しました。ゴールボール支援の取り組みが社員の間に広まり、関心の高まりを表す一例だと思います。



協会ロゴが入った卓上カレンダー(左)と手帳(下)。  
年末販促品として顧客に進呈し、競技普及にも貢献。  
協会ロゴのデザインはコーポレートカラーともマッチ。

——逆に、協賛に関連しての課題や悩みなどがあれば、お聞かせください。

松村

私は昨年、日本代表の練習を見学したのですが、選手たちは視覚障がいなど感じさせず、とても気さくで、イキイキと楽しそうで、まるで部活動のような印象を受けました。そんな皆さんに協賛できることを嬉しく思いましたし、より輝けるように応援していきたい。私と同じように多くの社員にも感じてほしいと強く思いました。そのためにも、コロナ禍で制限されがちな協会とのコミュニケーションを密にして、選手の活動情報などをどんどん発信していけたらと思っています。

——日本代表はコロナ禍の自粛期間を経て6月から活動を再開しましたが、「密」を避けるため、集団での練習ができない、手で触ることが人一倍多い競技なので消毒が欠かせないなど、大変です。それでも、選手たちは前向きで、「制限のある中でもできることをしよう」「目標高く、頑張ろう」とそれぞれが課題を持って競技に取り組んでいます。

上重

コロナ禍でリアルな交流会などは企画しにくい状況でもあり、だからこそ、情報発信は重要です。選手の皆さんの活動や思いを知ることは関心を高めるとともに、社員の励みにもなると思います。

松村

延期になってしまいましたが、実はファミリーイベントとして東京パラリンピックの観戦ツアーを計画していました。当社は全国に拠点がありますから、地方や支店の社員や家族にも参加してもらい、大会観戦を通じてパラリンピックの素晴らしさはもちろん、ゴールボールへの支援や障がい者理解といった社の取り組みを知ってもらう機会にもなればと考えていたのです。来年についてはまだ検討中ですが、何らかの形で実施できればと考えています。

——私たち協会も今後、パートナー企業向けに「ゴールボールサポーター」というメーリングリストをつくり、情報発信を充実させていく予定です。ご期待ください。最後に、選手たちにメッセージをお願いします。

井野

当社としては、コロナ禍の新しい生活様式の中だからこそ、新たなビジネスも生まれると思っています。今年4月からこ

の先 5 年の中期経営計画「未来へつなぐ Real Change2025」がスタートしました。今まで以上に社会的な課題解決を目指していて、共生・共存の社会の実現も重要な柱の一つです。社員一丸となって取り組むために、ゴールボールへの支援が大きな力になってくれると期待しています。

選手や協会の皆さんにもぜひ、東京パラリンピックの 1 年延期をプラスとらえていただきたいと思います。スポーツはビジネスとは少し異なるかもしれませんが、モチベーションを切らさず、コンディションをうまく保てた人が来年、勝利するのではないのでしょうか。お互いに気持ちを切り替えて前向きに、一緒に前進しつづけましょう。



本社エントランスに設置されたゴールボールのパネルボードの前で。  
左から、井野真吾さん、松村直人さん、上重貴靖さん

——ありがとうございます。これからも応援をよろしくお願いいたします。